

# 高校教育改革の意味するもの

——改革動向に関する全国調査をもとにした一試論——

村 澤 昌 崇

## 目 次

1. はじめに
2. 分析に使用するデータと方法
3. 分析結果
4. 分析結果の解釈：高校教育改革が意味するもの
5. おわりに：教育システムの肥大化



# 高校教育改革の意味するもの

——改革動向に関する全国調査をもとにした一試論——

村澤昌崇\*

## 1. はじめに

高校教育改革の時代と言われて久しい。すでに新しい試みである「総合選択制高校」<sup>1)</sup>「総合学科」「単位制高校」<sup>2)</sup>などが各地で開校され、それらを対象にした研究・評価も次第に蓄積されてきた(例えば牧(編)1993, 1994, 菊地(編)1997, 耳塚・樋田(編)1996)。これらの研究の多くは、特に新しいタイプの高校と言われる総合選択制高校, 単位制高校, 総合学科などを中心に, それらの実践及び実態に関する詳細な事例を研究・報告してくれるリアリティあふれるものである。

確かにこうした新しいタイプの高校に関する研究は, われわれが日常よく知っている(と思っている, あるいは知っている)と錯覚している)高校とは異なった様々な実態や機能を提示してくれる。しかし, こうした事例研究, あるいは質的な研究は, 見田の言葉を借りれば「おもしろい<sup>3)</sup>が, たしかさ<sup>4)</sup>がない」(見田 1979: 139)というレッテルを貼られがちである。

もともと全高校約5500校の中にしめる新しいタイプの高校の数は, 「新しいタイプ」であるがために少ないので, 統計的分析に耐えうるサンプル数を確保できないという制約がある。故に事例的研究にならざるを得ないという側面を持ち合わせるが, 注意せねばならないのは, 研究者は未知である新しいタイプの高校の世界を提示することで, よく知っている(と思っている)既存の高校の徹底的な分析を放棄しがちであること, そして研究の受け手(読み手)は提示された未知の高校の世界と既存の高校との情報格差により, 「高校(の実態すべてを)を見せてもらいました」という感覚にさせられること, さらに研究者はそうした「落差がもたらす体験」を利用することで, よく知っている=既存の高校を対象とした分析という負担を免除させてもらえる<sup>5)6)</sup>という危険性をはらんでいるということである。たしかに新しいタイプの高校に関する事例的研究の蓄積は, 今後の高校のモデルとなる可能性があるという側面があり, その丹念な観察も必要であろう。しかしともすると忘れられがちな, 既存の高校を含めた「私たちがよく知っている」高校の平均的な姿の分析も—そうした高校が大半を占めるだけに—必要とされるのである。そして諸々の具体的なデータ分析からより抽象的分析へと結びつけていき, 高校教育改革の, いや高校教育の持つ機能をできるだけ普遍的に取り出す作業が必要に思われる。

では, 現在の高校教育改革はいったい何なのか? どのような機能を果たしているのだろうか。そしてこうした改革は高校教育の何を照らし出しているのか。

---

\* 広島大学大学教育研究センター助手

## 2. 分析に使用するデータと方法

分析には「大学・高校改革プロジェクト」（委員長・西澤清）により実施された「高校教育と大学入試制度に関する調査」のデータを使用する。本データは高校教育改革の実態と大学入試制度に関する高校の考え方を全国レベルで把握した貴重なデータである。調査の対象は都道府県単位に層化無作為抽出した971校で、1996年11月に郵送法によるアンケートを実施し、有効回収数は439校、回収率は45.2%であった<sup>7)</sup>。このアンケートでは、近年「高校教育改革」として注目されているものの中から代表的と思われるものを14項目、高校入試改革については8項目についての実施状況を尋ね

表-1 高校教育改革の実施状況（度数）

	実施している	実施予定	検討中	検討していない	不明 無回答 非回答	合計
総合学科の設置	5	3	25	390	16	439
単位制の導入	12	8	33	370	16	439
特色ある学科の新設	51	16	67	289	16	439
既存の学科の名称変更	37	15	45	329	13	439
特色あるコース・類型の設置	153	31	83	159	13	439
進学を重視したコース・類型の設置	209	23	67	132	8	439
就職を重視したコース・類型の設置	92	15	49	265	18	439
一部教科での習熟度別学級編成の実施	69	7	51	293	19	439
HR単位での習熟度別学級編成の実施	212	16	75	130	6	439
特色ある科目の設置	121	34	105	169	10	439
教科・科目の選択数の増加	203	46	129	55	6	439
施設・設備の拡充・整備	137	81	153	58	10	439
制服デザインの変更	109	18	43	257	12	439
広報の充実	187	50	120	76	6	439
入試科目の消滅	26	1	17	366	29	439
入試科目の追加	7	2	7	394	29	439
傾斜配点の導入	39	2	29	339	30	439
推薦入学の導入	305	11	16	95	12	439
面接の導入	323	8	10	85	13	439
特別活動・ボランティア活動の重視	207	23	62	128	19	439
受験機会の複数化	148	11	18	237	25	439
小論文・作文・実技検査の導入	123	7	25	260	24	439

ている(表-1, 表-2)。まずこれら具体的な諸改革について因子分析を施すことにより類型化する。そしてそれら改革行動が、高校の基本的属性とも言える設置者, 学科, 大学進学率でどのような違いを見せるのかを分析する。さらにこうした計量的分析結果を踏まえて, 本稿では, システム論, 予期理論を援用することにより, 高校教育改革の高校にとっての機能を推測する。

表-2 高校教育改革の実施状況 (%)

	実施して いる	実施予定	検討中	検討して いない	欠損値	合計
総合学科の設置	1.1	0.7	5.7	88.8	3.6	100.0
単位制の導入	2.7	1.8	7.5	84.3	3.6	100.0
特色ある学科の新設	11.6	3.6	15.3	65.8	3.6	100.0
既存の学科の名称変更	8.4	3.4	10.3	74.9	3.0	100.0
特色あるコース・類型の設置	34.9	7.1	18.9	36.2	3.0	100.0
進学を重視したコース・類型の設置	47.6	5.2	15.3	30.1	1.8	100.0
就職を重視したコース・類型の設置	21.0	3.4	11.2	60.4	4.1	100.0
一部教科での習熟度別学級編成の実施	15.7	1.6	11.6	66.7	4.3	100.0
H R単位での習熟度別学級編成の実施	48.3	3.6	17.1	29.6	1.4	100.0
特色ある科目の設置	27.6	7.7	23.9	38.5	2.3	100.0
教科・科目の選択数の増加	46.2	10.5	29.4	12.5	1.4	100.0
施設・設備の拡充・整備	31.2	18.5	34.9	13.2	2.3	100.0
制服デザインの変更	24.8	4.1	9.8	58.5	2.7	100.0
広報の充実	42.6	11.4	27.3	17.3	1.4	100.0
入試科目の消滅	5.9	0.2	3.9	83.4	6.6	100.0
入試科目の追加	1.6	0.5	1.6	89.7	6.6	100.0
傾斜配点の導入	8.9	0.5	6.6	77.2	6.8	100.0
推薦入学の導入	69.5	2.5	3.6	21.6	2.7	100.0
面接の導入	73.6	1.8	2.3	19.4	3.0	100.0
特別活動・ボランティア活動の重視	47.2	5.2	14.1	29.2	4.3	100.0
受験機会の複数化	33.7	2.5	4.1	54.0	5.7	100.0
小論文・作文・実技検査の導入	28.0	1.6	5.7	59.2	5.5	100.0

### 3. 分析結果

#### 3.1. 改革行動からみた高校の類型

改革の実施状況について尋ねた質問項目22を使用して因子分析（主成分分解，バリマックス回転）を試みたところ，大きく5つの因子を得ることができた。これら5因子の説明力は47.6%であった。

表-3 高校教育改革の5類型

	入試の 多様化	トレンド改革と ハードの 整備・広報	諸コース の設置	対応：学力 基準—志向 性基準	入試科目 の操作
推薦入学の導入	0.755	0.086	-0.014	-0.033	-0.023
面接の導入	0.716	0.095	0.136	0.029	0.010
特別活動・ボランティア活動の重視	0.700	0.022	0.124	0.091	-0.120
小論文・作文・実技検査の導入	0.568	0.062	0.026	-0.035	0.251
受験機会の複数化	0.436	0.080	-0.051	-0.080	<b>0.355</b>
施設・設備の拡充・整備	0.142	0.714	-0.137	-0.089	0.122
教科・科目の選択数の増加	0.098	0.660	0.129	0.206	-0.214
特色ある科目の設置	0.031	0.621	0.097	-0.043	-0.092
広報の充実	0.016	0.556	0.194	0.048	0.260
制服デザインの変更	0.066	<b>0.357</b>	0.214	-0.179	0.231
就職を重視したコース・タイプの設置	0.146	0.039	0.801	-0.055	-0.176
進学を重視したコース・タイプの設置	0.020	0.064	0.761	0.244	0.156
特色あるコース・タイプの設置	0.055	0.209	0.697	-0.096	0.057
HR単位での習熟度別学級編成の実施	0.052	0.259	0.103	0.672	0.028
特色ある学科の新設	0.158	0.264	0.219	-0.586	0.166
既存の学科の名称変更	0.145	<b>0.339</b>	0.149	-0.582	-0.056
一部教科での習熟度別学級編成の実施	0.207	0.096	0.220	0.565	0.078
入試科目の追加	-0.045	-0.048	0.003	-0.074	0.673
入試科目の消滅	0.014	0.094	0.171	0.110	0.603
傾斜配点の導入	0.180	-0.003	-0.173	0.036	<b>0.337</b>
固有値	2.272	2.117	2.062	1.648	1.420
寄与率 (%)	11.4	10.6	10.3	8.2	7.1
累積寄与率 (%)	11.4	21.9	32.3	40.5	47.6

※因子負荷量0.400以上を採用した場合の因子構造。網掛け部分は因子負荷量が0.400に達しない変数であるが，それを含めても因子の命名には差し障りないものである。

すなわち改革行動という点から透かしてみた場合、高校の約半数は大きく5つのグループに分類されたということである。以下因子の説明をしよう（表-3）。

#### 第1因子：「入試の多様化」

このグループは入学者の選抜にあたって「推薦入学の導入」「面接の導入」「特別活動・ボランティア活動の重視」「小論文・作文・実技検査の導入」「受験機会の複数化」などを採用することによって、個性化・多様化時代に対応しようとしているグループである。

#### 第2因子：「トレンド改革とハードの整備・広報」

このグループは「特色ある科目の設置」「教科・科目の選択数の増加」という、今日の政策レベルでの目玉的な改革と、政策レベルでは取り上げられることはないが、私学を中心に近年ブームになっている「制服デザインの変更」という改革に取り組む一方で、同時に「施設・設備の拡充・整備」をはかり、さらに広く顧客である生徒やその保護者に宣伝するという取り組みを行っている高校群である。

#### 第3因子：「諸コースの設置」

このグループは「進学を重視したコース・類型の設置」「就職を重視したコース・類型の設置」「特色あるコース・類型の設置」が同じ因子を形成していることからわかるように、生徒の多様な関心・個性に対して、コース・類型という「トラック」を提供することで対応していること窺がえる。高校教育改革における「選択」の理念が、「教科・科目の選択」に限られず、「学科・コースの選択」をも含んでいる<sup>8)</sup>ことが、この分析結果からも推測される。

#### 第4因子：「多様化への対応：学力基準－志向性基準」

このグループは「HR単位での習熟度別学級編成」「一部教科での習熟度別学級編成」がプラスの因子負荷量を、「特色ある学科の新設」「既存の学科の名称変更」がマイナスの因子負荷量を示している。すなわちこのグループは、学力の多様性に応じた改革は実行しているが、特色重視の学科新設および学科の名称変更に対しては消極的な高校と、特色重視の学科新設および学科の名称変更には積極的に取り組んでいるが、学力の多様性に応じた改革に対しては消極的（あるいは実行しにくい背景がある）である高校が混在しているグループである。

#### 第5因子：「入試科目の操作」

このグループは入学選抜において、「入試科目の追加」あるいは「入試科目の削減」を行うという改革を実施している高校群である。

### 3.2. 改革のタイプと設置者・学科・大学進学率

これまでに見てきたように、改革のパターンは大きく5つに集約されることが確認された。では、

どのような属性を持つ高校が、どのような改革行動をとるのであろうか。ここでは先に得られた5つの因子ごとに因子得点を算出し、それを被説明変数とした重回帰分析を行う。説明変数には以下のような高校の属性的な変数を取り上げる。なお、分析においては、国立高校は度数が極端に少ない(3校)ので分析から除外した。

#### 分析に使用する変数

##### 被説明変数

- $Y_1$  : 第1因子「入試の多様化」の因子得点
- $Y_2$  : 第2因子「トレンド改革とハードの整備」
- $Y_3$  : 第3因子「諸コースの設置」
- $Y_4$  : 第4因子「多様化への対応：学力基準－志向性基準」
- $Y_5$  : 第5因子「入試科目の操作」

##### 説明変数

- $X_1$  : 人口規模：高校が設置されている都市の人口
- $X_2$  : 私立：私立高校 = 1, 公立高校 = 0 のダミー変数
- $X_3$  : 職業科：職業科 = 1, それ以外 = 0 のダミー変数
- $X_4$  : 併置校(普通科とそれ以外の専門学科を併置している高校を指す)：併置校 = 1, それ以外 = 0 のダミー変数  
 ※ 普通科は職業科 = 0, 併置校 = 0 で表現される。
- $X_5$  : 生徒数：実数
- $X_6$  : 大学進学率：平成八年三月卒業生のうち、短期大学以上進学者の占める割合。

表－4 高校教育改革の規定要因(標準化解)

	入試の多様化	トレンド改革 とハードの 整備・広報	諸コース の設置	多様化への対 応：学力基準 －志向性基準	入試科目 の操作
人口	-0.131*	0.000	-0.064	-0.106*	0.100 <sup>+</sup>
大学進学率	-0.139*	-0.003	-0.188**	0.232**	0.004
生徒数	0.061	0.000	-0.038	-0.032	-0.003
私立	0.009	0.352*	0.117*	-0.033	0.344**
併置校	0.151**	0.250 <sup>+</sup>	0.067	-0.223**	0.146**
職業科	0.212**	0.443**	-0.185**	-0.310**	-0.008
R <sup>2</sup>	0.120**	0.066**	0.062**	0.202**	0.177**
Ajusted R <sup>2</sup>	0.104	0.050	0.046	0.188	0.162

※\*は統計的検定の結果5%水準で有意, \*\*は1%水準で有意であることを示す。

分析結果は表－4の通りである。以下結果を読みとっていこう。

- ①入試の多様化に踏み切っているのは、人口が少ない場所に立地している、大学進学率の低い、併置校かあるいは職業科の高校である。
- ②トレンド的改革とハードの整備及び広報に力を入れているのは、私立高校、あるいは職業科、併置校に多い。
- ③様々なコースを提供することで多様化・個性化時代に対応していると見られるのは、大学進学率の低い高校、私立高校である。職業科は他の学科に比べるとコース・類型の設置には消極的なようだ。
- ④学力の多様化への対応を積極的に行っているのは人口の少ない場所に立地している高校あるいは大学進学率が高い高校（回帰係数0.232）、あるいは普通科である（併置校ダミーおよび職業科ダミーの回帰係数がそれぞれ-.233, -.310である）。一方生徒の志向性を基準とした改革（特色ある学科の設置や既存の学科の名称変更）を実施しているのは、人口が多い場所に立地している高校、大学進学率が低い高校、普職併置校、職業科の高校である。
- ⑤入試科目の操作を積極的に行っているのは、私立あるいは普職併置校の高校である。

以上の結果を概観するならば、総じて多様化・個性化に関連していると思われる改革に積極的に着手しているのは大学進学率の低い高校、私立高校、職業科、普職併置の高校であり、近年の高校教育改革が職業科を中心とした高校の階層構造下位の部分で進行中であるという指摘（例えば菊地1996、橋本1996）と整合する結果が得られた。また、大学進学率の低い高校および、普職併置校に注目してみると、改革には概ね着手しているものの、職業科に比べると改革着手の程度が低い。しかも普職併置校は「トレンド的改革への着手とハードの整備・広報」および「諸コースの設置」の2つの改革に関しては、普通科との差が見いだせなかった。大学進学率の低い高校は、進路の面では職業科的性格も併せ持つ（職業科そのものも含まれる）こと、そして併置校は制度上普通科と職業科の2つを併せ持つという性格上、これら2タイプの高校は、改革によって普通科へと変貌を遂げるのか、それとも職業科へと変貌を遂げるのかの二者択一を前にして困惑している姿が想像される。

#### 4. 分析結果の解釈：高校教育改革が意味するもの

##### 4.1. 予期せざる事態への対処としての「改革」

これまでの分析結果が明らかにしたこと、すなわち高校教育改革が大きくは5つの分野で括られ且つ進行していること、そしてこれら諸改革が職業科や大学進学率の低い普通科といった、高校の階層構造の下位校および私立高校などを中心にとり組まれているということは、実態の分析という意味では「意外な」あるいは「おもしろい」結果をみちびきだしたというわけではない。これら分析結果はすでに感覚的には把握されていたことであり、むしろ高校教育改革実践担当者にとっては

「あたりまえ」のことである。そして以上のような改革の有り様を、「個性化・多様化」「市場原理」「経営戦略」「人口動態」などの一連の言葉を巧みに絡めながら解釈するという記述は、本稿で展開するまでもなくあふれていると言っていいだろう。

本稿では、高校教育改革の実態という、組織という行為主体の具体的な行為行動の類型化作業から、さらに高度で抽象的な解釈を試みる。その準拠点となるのが宮台の予期理論およびシステム論である<sup>9)</sup>。

システム論によれば、システムは未規定な環境を、規定され構造化された環境に変換して認識し、かかる環境のなかで体験・行為を選択することで自分自身を維持するという(宮台 1987:27)<sup>10)</sup>。わかりやすく言えばつぎのようになる。すなわち、私たちの行為の帰結は必ずしも、期待通りにはならない。とりわけ現代の複雑な社会においてはなおのことだ。期待通りにならなかったときに、それはシステムにとっての負担になる。システムはそうした負担をそのまま放っておけばシステムの崩壊を導きかねないので、何らかの方法でその負担を取り除き、システムの安定を図ろうとする(宮台 1994:172-173)。しかも「この事情はパースンシステムも社会システムも同じである」(宮台 1987:27)。

このようなシステム論的な見方をすれば、高校教育改革は、高校教育というシステムにとって、「期待はずれに抗して自己像を維持する戦略」(宮台 1994:183)、すなわち複雑性の縮減という、より抽象的な行為と見なすことができる。その抽象的行為の今日的文脈の限りにおける(いわゆる多様化・個性化という文脈)発現形態が、これまでの統計的分析で明らかになった、改革の5類型であるにすぎないのである。5つの改革類型は、たとえそれが入試の多様化であったり、いろいろなコースの設置であったりトレンド的改革であったりしてその内容が異なっても、生徒の多様化・個性化という「複雑性を縮減するという機能」を果たしているという点で、あるいは学齢期人口の減少という「期待通りにはならない事態」に抗して「自己を維持する戦略」という機能を果たしているという点で等価であると思なすことができる。

#### 4.2. 自己維持が困難な併置校

「人は生きていくために<世界>を意味あるものにしようとする」(宮台 1994:177)。同様に、個々の高校も自らにとって<世界>を有意味なものにしようとする。改革の5つのパターンを高校の制度的・非制度的性格も絡めて分析すると、大学進学率の低い高校、職業科、普職併置校、私立高校が、個性化・多様化をベースとした改革を積極的に行うことにより、自己維持を図ろうとする傾向があることが、重回帰分析から明らかにされた。学校教育法第四十一条は「高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、高等普通教育および専門教育を施すことを目的とする」とあるが、社会的な要請は、高校に進路の保証、特に大学進学準備機関としての性格を期待している部分が多い。そのような状況にあって、大学進学率の高い普通科校が改革に消極的(逆に言えば積極的に改革を行わない)であるのは、そうした社会的な要請を満たしているという点で、すでに環境の構造化に成功している(故に今日の改革には消極的であるか、あるいは現在の大学進学準備機能を一層強化するだけでいい)からである。職業科は、もともと専門教育を施すこ

とが中心的機能で、今日の状況に置いては一般的に「就職」という形で生徒の進路を保証するという機能を求められている。故に、大学進学率を向上させることは、職業科にとってはもともと「無意味なもの」と先決されうる。さらに、現在は画一的教育、受験重視の詰め込み教育が批判され、多様化・個性化重視が叫ばれる時代でもあるから、階層構造の下位にある職業科が多様化・個性化重視の改革を行うことは、普通科とは別の意味で社会的（政策的といってもいい）要請を満たしており、その意味で、職業科は環境の構造化に成功していると言えよう。このように階層構造の両極にある高い進学率の普通科の「改革に消極的」という戦略と職業科の「改革に積極的」という戦略は、それぞれの自己維持を果たしているという意味において、機能的に等価なのだ。

こうした2種類の高校の中間に位置するのが大学進学率の低い高校および普職併置校である。これら高校は進路の面から見て事実上普通科と職業科の両方の機能を請け負わされている。故に、単純に考えて普通科単独、職業科単独高校の2倍の複雑性という負担に直面する。これら高校の複雑性の縮減戦略は少なくとも①エリートあるいは準エリート大学進学校化戦略、②職業高校化戦略、③併置校独自路線、の3つが考えられる。しかし重回帰分析で見ると、①よりも②、すなわち職業科がとる戦略に近いものがあるが、職業科ほど改革に積極的ではない。このことからこれら2つの高校は、普通科化することもできず、職業科化することもできず、自己イメージの確立に失敗しており、それ故に、<世界の有意味化>戦略を決めかねているとも解釈できよう。ただし、表-5を見てもわかるように、普職併置校については総合学科設置率が他の学科に比べて有意に高い。このことから、普職併置校は総合学科化を図るという独自路線を採用することによって、普通科でもあり職業科でもあるが、普通科でもなく職業科でもないという曖昧さという複雑性を縮減し、自己維持を図ろうとしているとも考えられる。

表-5 総合学科の設置

	度数			%		
	実施して いない	実施して いる	合 計	実施して いない	実施して いる	合 計
普通科	217	1	218	99.5	0.5	100.0
職業科	96	2	98	98.0	2.0	100.0
併置校	102	5	107	95.3	4.7	100.0
合計	415	8	423	98.1	1.9	100.0

※統計的検定の結果、5%水準で有意。

#### 4.3. 時代を超えた機能的等価性

しかし高校が、そして高校教育システムが「期待はずれ」や「予期せざる事態」に直面してその内部に負担を増大させ、そのつど何らかの方法でその負担を軽減しようとしてきたという状況は、何も今日に限られたことではない。そうすると、現在では複雑性を処理するための戦略として多様

化・個性化重視の改革が多く採用されてはいるが、別の時代的文脈では全く別の戦略が、複雑性の処理装置として採用され高校教育システムを維持していた可能性がある。

例えば、戦後直後の高校教育システムは、連合国軍総司令部の指導のもとに自由主義的個人主義に則った乗っ取った改革が行われ、科目選択制が導入された<sup>11)</sup>。しかし後に科目選択制は、大学、財界、高校自体から様々な批判や欠陥を指摘され一例えば、選択制にすると安易な科目選択を行う生徒が増加して基礎学力が低下する、職業教育を軽視している、教員数・教室数などの制約により実施事態が困難であるなど、コース制・類型制へと形を変えてゆくことになる（谷田 1995、飯田 1996、黒羽 1997）。このような当時の経過は、今日の高校教育の将来を予測する上でも重要である（歴史は繰り返すのかどうか、という点において）。ただここで本稿が目的としているのは、一見具体的な行為レベルでは、「選択肢の増加」と「選択の制限」という、相反する行為に見えるものも、抽象レベルでは、学力の面でも志向性の面でも分散が大きくなってひと括りにはできなくなったという「複雑性を縮減するための行為」であり、また、大学、財界からの批判という「予期せざる事態」あるいは運用上思わぬ欠陥が生じたという「期待はずれ」を馴致し無害化するという行為であり、機能的に等価であるという点である。

## 5. おわりに：教育システムの肥大化

これまでに見てきたように、高校教育システムが改革という名の下にさまざまな行動をとる場合、一見多様に見えたり正反対に見えたりする行動は、抽象レベルに昇華させた場合には、環境の構造化、あるいは複雑性の縮減という機能を果たしている点において、横断的にも縦断的にも等価であることが推察された。最後に注目したいのは、複雑性への対処を、高校という「学校」でほとんどすべて処理しようとする行為<sup>12)</sup>である。

日本の学校は「期待はずれ」や「予期せざる事態」に直面したばあい、量的にも質的にもシステムの内部で負担の軽減を処理してきた結果、育児・しつけ、社会化機能、選別機能、知識や規範、社会的配分の正当化機能などをシステム内へ包摂し（樋田 1997：163）、複雑且つ肥大化していったと思われる。

しかし、どうして学校は「期待はずれ」や「予期せざる事態」に直面したときに、様々な機能を内部へと包括したかたちで対処し、肥大化したのか。この問いの背景には、学校が予期しがたい出来事に直面したときの対処戦略として、システムの内部へと包括する以外に別の、機能的には等価な対処戦略があったのではないか？という仮説がある。ここでは、宮台（1994）が論じた現代の宗教的志向の機能的特徴をベースに試論を展開してみよう。

現代の宗教的志向の機能的特徴は、①浮遊系、すなわち「個別的な問題設定」にもとづく宗教性、②覚悟系、すなわち「縮約的な問題設定」にもとづいて〈世界〉における包括的処理を行う宗教性、③修養系、すなわち「縮約的な問題設定」にもとづいて〈自己〉における包括的処理を行う宗教性、という3つがあるという（宮台 1994）。以下それぞれの特徴を見てみよう。

- ①浮遊系：比較的単純な構造で、前提を欠いた偶発性<sup>13)</sup>を馴致し無害なものとして受け入れる際に、(観察者の側から見て)超現実的關係を持ち出す。「規則的な生活をしていたにもかかわらず、病気になったのは水子供養をしてなかったからだ」
- ②覚悟系：前提を欠いた偶発性を馴致し無害化する際に、<世界>の側を拡張することで、自己と<世界>の關係一般が馴致される。運命・宿命・使命などの觀念を用いて<世界>はあらかじめ決められていて、自己の側には極小の自由しかないという把握がなされる。つまり問題は<世界>に帰属する。「これがわたしの使命なのだ」
- ③修養系：前提を欠いた偶発性を馴致し無害化する際に、自己を拡張することで、自己と<世界>の關係が馴致される。すべての問題は、自己の体験様式にあるという把握がなされる。つまり問題は自分に帰属する。「つらい出来事があるというよりも、つらいと感じる自分の境地がある」

今日の学校の包括・肥大化の傾向は、③の修養系に近いのではないかと思われる。学校が予期せざる困難に直面した場合、その問題を学校自身に帰属させることはしばしばあるし(例えば、学歴社会の問題や、受験競争、いじめなどの問題をすぐさま教育に帰属させることは日常茶飯事である)、その結果自己を拡張すること、すなわちさまざまな機能をシステム内に包括することによって、問題を無害化しようとしているのである。①のように浮遊系でもないようであるし<sup>14)</sup>、②のような覚悟があるわけでもなさそうである(もし②のような覚悟系であれば、少なくとも学校は一部の機能に特化するはずである。例えば「生徒の進路の保証だけが学校の使命なのだから、しつけは家庭でやれ!」というように)。では、なぜ学校は③の修養系的な包括・複雑化・肥大化を遂げたのであろうか。この問題に関しては過去に遡ることで対応する必要があるが、今回は紙幅の關係上別の機会に譲ることとしたい。

## 【注】

- 1) 総合選択制高校はとりわけ今日の新しいタイプの高校として注目を浴びがちであるが、実は新制中等教育発足当初から理念型としては見られたものである。詳しくは佐々木(1979, 1976)を見よ。
- 2) 単位制は、すでに1949年から全面的に採用された(普通科のみは1948年度から)ものであるが、今日では「その発足から、学年制との關係ではあいまいさを含んでおり、その後の教育課程の改訂を通じて、次第に形骸化している」(佐々木 1976:173-174)ものである。このことから、単位制は特に「新しい」制度というわけではなく、「学年制の中での単位制」という矛盾にやっと一部メスが入ったとも言える。
- 3) 見田が指摘するデータの「おもしろさ」の測定基準は、①追体験的な了解可能性、②総合的、多元的把握、③動的な把握の3つである。質的データのおもしろさは「諸次元のダイナミックな關係をそのあるがままの姿で示し、生きいきとした具体性と『了解可能性』を保ちうる」(見田

- 1979：140) という点である。
- 4) データの「たしかさ」の基準は、そのデータの「代表性」および分析手順や着眼点の「標準化」である (見田 1979：140)。
  - 5) 宮台 (1994：150-151) を見よ。宮台は「高度消費社会」の分析に先立って、1980年代後半から勃興した「現場主義」の陥穽を、「システムが構成する情報格差によってもたらされる錯覚」という形で指摘・展開している。本注以前の文章の一部は、その宮台の論理的説明を、高校という具体的分析対象に置き換えて展開したものである。
  - 6) この指摘は、高校教育改革に関する事例的研究及びその研究者が、現場主義の陥穽に陥っていることを意味しない。
  - 7) 調査の概要については大学・高校改革プロジェクト (1997) を参照。
  - 8) このことについては飯田 (1996：67) が指摘している。
  - 9) すでに樋田 (1997) による試みがあるが、本稿では高校教育システムの機能を統計的分析と絡めてさらに抽象化することを目的としている。
  - 10) システムの定義は多様であるが、本稿では橋爪 (1994：2) が提示した「いくつかの要素からなる秩序ある全体」という「とりあえずの定義」をベースとしよう。
  - 11) しかし、規定上大幅に導入されたかに見えた科目選択制には、①教育課程の類別が強固だったという点、②職業課程における学校必修が存在したという点、において事実上一定の「枠」があったことが指摘されている (飯田 1996)。
  - 12) あるいは、「学校にすべて処理させようとするという社会の行為」とも言える。
  - 13) 「別のようにでもあり得たのにこうなっていること」を意味する。宮台 (1991：75-79, 1994：204) を見よ。
  - 14) しかし、「現在の高校教育システムがうまく機能しなくなったのは、生徒が多様化・個性化したからだ」という今日の馴致の仕方は、観察者によっては、「多様化・個性化」というタームがあまりに一般的・抽象的すぎて、ともすると超現実的なものとして写るために、浮遊しているように見えるかもしれない。

## 【参考文献】

- 大学・高校改革プロジェクト. 1997. 『高校教育改革と大学入試制度改革に関する調査報告書』. アドバンテージサーバー.
- 「月刊高校教育」編集部 (編). 1994. 『高校教育基本資料集 答申・報告編 (上)』. 学事出版.
- 「月刊高校教育」編集部 (編). 1994. 『高校教育基本資料集 答申・報告編 (下)』. 学事出版.
- 橋爪大三郎. 1994. 「構造とシステム」. 『岩波講座 社会学の方法 第X巻 社会システムと自己組織性』第1章 (pp. 2-32). 岩波書店.
- 橋本健二. 1996. 「高校教育の社会的位置の変遷と高校教育改革」. 耳塚寛明・樋田大二郎 (編) 『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育の比較教育社会学—』第5章 (pp. 74-87). 学事出版.

- 樋田大二郎. 1994. 「ルーマンの理論で教育を考えるとー日本の高校教育改革の議論と絡めて」. 『近代教育フォーラム』第3号. 近代教育思想史研究会.
- 樋田大二郎. 1997. 「教育の『多様化』と高校教育の可能性」. 菊地栄治(編)『高校教育改革の総合的研究』第9章(pp.159-171). 多賀出版.
- 飯田浩之. 1996. 「高校教育における『選択の理念』」. 耳塚寛明・樋田大二郎(編)『多様化と個性化の潮流をさぐるー高校教育の比較教育社会学ー』第4章(pp.59-73). 学事出版.
- 菊地栄治(編). 1997. 『高校教育改革の総合的研究』. 多賀出版.
- 菊地栄治. 1996. 「高校教育改革の『最前線』」. 耳塚寛明・樋田大二郎(編)『多様化と個性化の潮流をさぐるー高校教育の比較教育社会学ー』第2章(pp.27-44). 学事出版.
- 黒羽亮一. 1997. 『ジャーナリストからみた戦後高校教育史』. 学事出版.
- 牧 昌見(編). 1993. 『高校教育改革モデルの浸透可能性に関する実証的研究(中間報告)』. 文部省科学研究費補助金報告書.
- 牧 昌見(編). 1994. 『高校教育改革モデルの浸透可能性に関する実証的研究(最終報告)』. 文部省科学研究費補助金報告書.
- 耳塚寛明・樋田大二郎(編). 1996. 『多様化と個性化の潮流をさぐるー高校教育の比較教育社会学ー』. 学事出版.
- 見田宗介. 1979. 『現代社会の社会意識』. 弘文堂.
- 宮台真司. 1987. 「現代大学生の消費生活の意味するものー意識調査をもとにしてー」. 『社会心理学評論』6:25-46.
- 宮台真司. 1989. 「階層・消費・システム」『現代思想』17(6):114-125.
- 宮台真司. 1991. 「行為と役割」. 今田高俊・友枝敏雄(編)『社会学の基礎』第3章(pp.57-96). 有斐閣
- 宮台真司. 1994. 『制服少女たちの選択』. 講談社.
- 佐々木享. 1976. 『高校教育論』. 大月書店.
- 佐々木享. 1979. 『高校教育の展開』. 大月書店.
- 谷田勇人. 1995. 「高校教育課程の変遷と個性」. 山口 満(編)『教育課程の変遷からみた戦後高校教育史』第10章(pp.194-206). 学事出版.
- 山口 満(編). 1995. 『教育課程の変遷からみた戦後高校教育史』. 学事出版.

# What Do Reformations of Japanese Senior High Schools Today Mean?: One Research Analysis

Masataka MURASAWA\*

What do current Japanese senior high school reformation mean? What functions do they have for high school system? To give some answer to those previous questions, first, this paper aims to grasp actual conditions of Japanese high school reformation, by using data of a research on high school (439 samples). Using the factor analysis and the multiple regression analysis, the author found that current 22 high school reformations largely gather into five reformation factors and that those five reformation factors are affected by the percentage of students who enter into higher education (negative effect), by the type of establishment (effect of private sector is positive) and by the type of courses (high schools which have only vocational courses and have both general and vocational shows positive effects).

Second, the author tried to give theoretical description to the function of high school reformations for high school system, based on the first statistical analysis. As the results, current high school reformations contribute to structure environmental undetermined complexity of each high school system, and in that point, they are functionally equal to each other.

---

\* Research Associate, R.I.H.E., Hiroshima University